

異界の魔術士

無敵の留学生3

ガリウス

派遣騎士団の副団長。
ルティレイフィアの
婚約者でもある。

ダンバック

かつてフレグンスの
裏社会を牛耳っていた人物。
再び王都に戻ってくるが、
その目的とは——？

ブレブラバント

大族長。未開の地アーサリム
の多部族をまとめている。

ルティレイフィア

フレグンス王国の
第二王女。剣士として
兵を率いて戦う。

ブラット

傭兵団長。
『銀月の牙』という
傭兵団を率いる。

アンバツス

辺境騎士団に属する熟年騎士。
朔耶とは何かと縁がある。

バルティア

グラントウルモス帝国の皇帝。
隙あらば朔耶を口説こうとする。

レティレスティア

フレグンス王国の
第一王女。優れた
精霊術士でもある。

しげお 重雄

朔耶の兄。異世界の
美女をカメラで
撮りまくる萌えオタ。

つづきさくや 都築朔耶

地球と異世界を行き来する少女。
『戦女神』『異界の魔術士』など
と呼ばれている。今はフレグンスの
王都大学院に在学中。

目次

異界の魔術士 無敵の留学生3	7
番外編 異界の道化士 ^{どうけし} 閃光魔人の狂騒譚 ^{せんこうまんのきょうそうたん}	175
番外編 カンフオタブル ナイト	267

異界の魔術士

無敵の留学生 3

夕日に照らされる王都フレグンス。その王宮区画にある精霊神殿にて、黒髪の少女が精霊神官達と向かい合っていた。

『戦女神』とも呼ばれる異界の魔術士、都築朔耶である。

豪華な客間のテーブルで、お菓子を頬張りつつ、お茶を頂いている朔耶。

そんな彼女に、少し緊張気味な様子の精霊神官が挨拶の口上を述べる。

「本日はお忙しいところをお呼び立てして申し訳ありません。精霊神殿を預かる者として、是非ともサクヤ様にお話ししたい事がございまして」

「いいよいよ、堅苦しいのは無し。んで、今日はどうしたの？」

「寛大なお言葉、痛み入ります。実はサクヤ様にも願いが……」

地球世界の高校を卒業し王都フレグンスの大学院に留学してきてからというもの、朔耶は学生キャンプや修学旅行など、立て続けに新しい行事を提唱して大学院の発展に貢献してきた。

おかげで大学院の運営は好調で、入学希望者や寄付も増えている。朔耶を精霊の力の象徴として称える精霊神殿としては、自分達も戦女神サクヤの恩恵を賜りたい——という話だった。

「サクヤ様のお力により各地の精霊神殿の活動も順調で、今までにないほど安定しております。しかしながら、王都では若者の信徒が増えず……ここは何卒、サクヤ様のお知恵を拝借したく」

「うーん、お知恵を拝借と言われても」

いくら自分が精霊神殿の象徴と称えられているからといって、若者達に信者になる事を勧めるような活動をする気にはなれない。信仰は人に勧められてするようなモノでは無いと思うからだ。自ら信じる心にこそ信心は宿る。

若者に精霊神殿に対する興味を持ってほしければ、もっと知ってもらう努力をするべきだろう。

「何か若者向けの催しとか無いの？」

「一応、精霊祭という内々の祝い事はございます」

「じゃあ、それをもっと大々的にやるのはどう？ 神殿の中に籠もって信徒だけで祝うんじゃなく、王都の一般民も参加できるお祭りにすればいいんじゃない？」

精霊信仰は精霊の国と呼ばれるフレグンスの国教なのだから、王都の民が参加しても問題は無いはずだと主張する朔耶。

しかし精霊神殿は今まで閉鎖的だったため、そういったオープンな催しを開いた経験が無いとい

う。いきなり神殿だけで何かしようにも思いつかないらしい。

「それなら名目だけ精霊祭にしておいて、実際は神殿の敷地で普通にお祭りをするとか」

神殿の敷地を一部開放して一般民に料理を振る舞い、一緒に祝うというのを恒例にすれば、神殿で行事が行われる度に多くの人々が集まるようになる。

「ううむ、しかしそれでは、本当にささやかな祭りで終わりそうに思いますが……」

民衆がただ飲み食いして満足するだけで、信徒の獲得は期待できず、精霊信仰の活性化にも繋がらないのではないか。そう意見した神官は、初めは遠慮して提示しなかったらしい神殿側の要望を具体的に告げる。

入学希望者が大きく増えた大学院のように、多くの信徒を獲得できる催しが欲しい。とはいえ、あまり世俗寄りの内容だと神殿の威厳が損なわれる。

なので、それなりの崇高さを保ちながら多くの人を集められて、かつ精霊信仰の宣教も出来るような催しを企画してもらいたいのだという。

(どないせーと)

朔耶は内心でそうツツコミながら、とりあえず身内にも相談してみると言って話を打ち切った。

その夜。

地球世界の都築家に帰った朔耶は、夕食の席で兄の重雄と弟の孝文に愚痴る。

「学園祭も近くて忙しいってのに、そんな都合よくいい案が浮かぶかー！ あたしは便利屋じゃなーい！ 便利に使われてるけどっ」

などと言いながら、大根のお浸しをモリモリ食べる。

近々、王都大学院で開かれる予定の学園祭。実はこの催しも、朔耶が新たな学校行事として提案したものである。

王都大学院には、入学や卒業を祝うような行事が無い。明確な学年分けもされておらず、本人に学ぶ気さえあればいつでも入学できて、何年でも学業に励めるのだ。

そこで朔耶は、どうせなら特定の時期に学園祭をやって、新しく入学してきた院生を纏めて歓迎してはどうかと提案した。

『そんなもって、また次の学園祭の時に、それまでに入学した新入生を祝う、みたいな感じで』

これには大学院の教師陣も乗り気になった。

『それは素晴らしい案ですな』

『その方法なら、貴族庶民間わず、全ての院生を平等に祝う事が出来ますぞ』

大学院は、貴族や商人からの寄付によって運営費が賄われているので、色々としがらみも多い。

特に身分や家柄が絡む諸問題は、朔耶の影響で生徒達が随分大らかになった今でも少なくなかった。

だが全ての学生と教師の参加を前提にした行事なら、一部の生徒に対する優遇や過度な配慮、そこから来る生徒間の不和といった、これまで切っても切り離せなかった問題の軽減も見込める。

身分や家柄の問題を軽減させつつ、大学院の魅力を大々的に宣伝できる学園祭の開催を、教師陣は満場一致で決定した。

日頃の修学の成果を披露する絶好の機会だと、生徒やその親達も肯定的であった。

学生キャンプと修学旅行の成功もあって、学園祭には大きな期待が掛けられている。

そして今回は朔耶とエルディネイア達だけでなく、他にも複数の学生グループがそれぞれ学園祭の運営方法やイベントの内容を考える事になっていた。

もちろん朔耶とエルディネイアチームが中心なのは相変わらずだが。

「学園祭のイベントも考えなくちゃならないのよねー」

ぼやく朔耶に、重雄が一つの提案をした。

「それなら学園祭と精霊祭をコラボさせるのはどうだ？」

「コラボ？ 精霊神殿のお祭りを大学院でやるの？」

新人生の歓迎も兼ねた学園祭に、精霊神殿の精霊祭をミックス。実質的には学園祭を彩るイベントの一つとして精霊神殿によるアトラクションが入る形になるだろうが、精霊祭の名を前面に押し出す事で精霊神殿の存在感を高められる。

「精霊への祈りとか感謝の祝詞とか、適当に演出してやればいいんじゃないか？」

「なるほど……さすがお兄ちゃん」

祭り事に関しては冴えたアイデアを出してくると感心する。朔耶はこの案について、王妃アルサレナに相談する事にした。

翌日。王都フレグンスの王宮にて。

二階のサロンで王妃アルサレナと向かい合った朔耶は、精霊神殿からの依頼と重雄のアイデアを話して意見を伺う。

「つていう案なんですけど、どうですか？」

「良い案ですね。精霊神殿の状況に関しては私も憂慮していました。ここはいつその事、もう少し大袈裟にしてみましようか」

「大袈裟に？」

アルサレナは、重雄のアイデアをさらに発展させ、学園祭と精霊祭の両方を国の支援で大々的にやるという案を挙げる。

王都での精霊神殿の存在感が薄れているので、これを機にテコ入れしたいのさという。

「国家の伝統に関わる問題でもありますからね。この企画は私が預かりましょう」

「なるほど、分かりました。じゃあ、あたしは学園祭の方に集中しますね」

こうしてアルサレナ預かりになったこの問題は、城の上層部で官僚も交えて話し合われ、あくまで大学院の行事の一環としながらも、国がバックアップする大規模な催し物へと組み上げられていった。

最終的に国外の賓客も招いての一大イベント、『精霊文化祭』の開催が決定。約六日間にわたり、主に夕方から夜にかけて行われる。

この事はフレグンス王室から国内に限らず、各国に向けても大々的に発表された。

第一章 精霊文化祭の下準備

精霊文化祭の開催にあたり、グラントウルモス帝国や知の都ティルファ、部族国家アーサリムにも要人の出席を打診する事になった。

朔耶は学園祭の催し物を計画する傍ら、フレグンス高官として招致活動のために各国を飛び回らなければならぬ。

「悪いけど、こっちだけに集中できないのよね。今日はティルファに行ってくるわ」

大学院の一階サロンにて、エルディネイアをはじめとするいつものメンバーと集まっていた朔耶は、あまり学園祭の話し合いに参加できなくなる事を詫言ひる。

フレグンスの上層部が交渉の日時や順番を決めて、朔耶はそのスケジュールに沿って動く。朔耶の好きなタイミングで訪問して招致活動をするというわけにはいかないのだ。

「貴女の立場上、仕方ありませんわ。それに今回は、私達だけでなく他のチームの皆さんも運営に関わってくださいますし、それほど負担にはならないでしょう」

エルディネイアがそう言ってフォローすると、テーブルを囲むチームメンバーの皆も頷いて同意

した。

「そっか。じゃあちよつくらブラハミルトさんに会ってくるんで、後よろしくね」

「ええ、任せましてよ」

席を立った朔耶に、チームメンバーのリコーが手を振る。

「サクヤちゃん、いつてらっしゃーい」

「いつてらっしゃいですわー」

ルーネルシアも伸びぐる語尾で見送る。

ひらひらっと手を振った朔耶は、駆け足でサロンを出ていった。

まるで友人に会いに行くような軽いノリでティルファの主導者のもとへ交渉に出掛ける朔耶。そんな朔耶を見送ったチームメンバー達は、やはり彼女は特別な人なんだなと改めて認識する。

「さあ、サクヤがいない分、私達が頑張らなくてはいけませんわ」

「といっても、奇抜な発想ってのは頑張っても出るものじゃないからねえ」

どしどしアイデアを出せと発破を掛けるエルディネシアに、ドーソンは自分達の出来る範囲で精一杯やるべきだと示唆する。

「サクヤにしか出来ない発想は彼女に任せて、僕らは僕らだからこそ出来る無難な企画を詰めていくべきだと思うよ」

「う……そんな事は分かっていますわ」

少し頬を染めながら、ぶいっとそっぽを向いて腕組みするエルディネシアと、最近微笑がサマになってきたドーソン。そんな二人を生温かい眼差しで見守りながら、チームメンバー達は学園祭の企画について話し合うのだった。

知の都ティルファ。湖の真ん中に聳える中央研究塔の所長室を、フレグンスの高官として訪れた朔耶は、中央研究塔所長ブラハミルトと向かい合っている。

「そんなわけで、ブラハミルトさん達にも参加してほしいなってどこなんですよ」

「なるほど、国を挙げての催し物ですか」

なかなか面白そうだと、ブラハミルトは乗り気のようなのだ。ティルファには既にフレグンス王宮からの公式な招待状が届いている。

「わざわざ貴女を派遣する辺り、かなりの力の入れようですね」

「何か伝統とか威信とか色々交じって大変みたいですよ？」

他人事のように語る朔耶に、ブラハミルトは思わずといった様子で噴き出した。

「それでは公式な回答は後日、招待状への返答という形で示しましょう」

「分かりました。よろしくお願ひしますね」

ブラハミルトとの会談を終えた朔耶は、その足でフレグンス城まで飛んで、王妃アルサレナに報告する。

「多分、二、三日中には参加のお返事が届くと思います」

「そうですね、ご苦勞様でした。今日はこれであがつて結構ですよ」

アルサレナに勞われた朔耶は、フレグンス高官としての仕事を終えて大学院へと向かう。ここからは学院生として、エルディネイア達と大学院側の催し物を考えるのだ。

大学院のサロンに着いた朔耶は、エルディネイア達が集まっているテーブルへとやってきた。

「ただいま、今どんな感じ？」

「サクヤちゃんおかえり」

「お帰りなさいサクヤ。ちょうど催し物の概要がいくつか纏まったところですわ」

「おかえりなさいですわ〜」

普段通りワンテンポ遅れているルーネルシアに和みながら席に着いた朔耶は、纏められた催し物リストに目を通した。その大まかな内容は――

本校舎内…中央塔サロンレストラン。(庶民の料理から貴族の料理まで全て生徒達の手作り)
学び塔内…生徒達の模擬戦観覧。貴族のダンスショー。学院生の工芸品展示。(購入も可)
学院校庭…学院生による露店や装飾魔術ショーなどの催し物。

大学院には講師の宿舍や学生寮、食堂や厨房など生活全般を支える施設が集中する中央塔と、その周りを囲む『武術の塔』『魔術の塔』『教養の塔』『技師の塔』の四つの学び塔がある。

校庭には精霊神殿の祭壇が設置される予定なので、神殿側の催しとの兼ね合いも考えなくてはならない。

朔耶はリストに目を落としつつ、ふと気になった事をエルディネイアに訊ねる。

「中央塔サロンのレストランは一般客向けなのよね？ 料理は全て生徒の手作りってなってるけど、もしかしてルディみたいな貴族の子達も料理とかするの？」

「私は厨房に立った事はありませんけど、侍女になるために料理を学んでいる方達もいますわ」

「ああ、なるほど。学び塔内の催し物はそれぞれ別の塔を使うわけね？」

続けて訊ねる朔耶に、エルディネイアは今現在決定している内容を説明する。

「そうなりますわ。模擬戦の観覧は武術の塔の二階を、ダンスは教養の塔、工芸品の展示と販売は技師の塔をそれぞれ使う予定になっていますの」

「魔術の塔は何に使うの？」

「まだ決まっていますせんわ。一応、魔術を使った出し物を考えているようですけど」

魔術の塔のイベント運営を担当している学生チームの話では、塔を代表する学生術士達の意見がバラバラで纏まらないらしい。

「あゝ、らしいって言えばらしいかな」

世間一般でよく聞かれる魔術士のイメージ——『変わり者』や『偏屈者』——というのは、協調性の無さに通じる。そういった特性が学生術士達にも現れているのかなと朔耶は半分納得した。

「何でも攻撃魔術の実演派と支援魔術の体験派が揉めてるそうですわ」

エルディネイアはそう言って、チームメイトである攻撃型魔術士リコーと支援型魔術士ノーマに視線をやる。

ちなみに、エルディネイアの親友であるルーネルシアも支援型魔術士のだが、天然気質な彼女に意見を求めても斜め上の回答が返ってくる可能性が高いので、スルーされていた。

「そういえば、あたし宛に実演派を支持しろって言伝があったわね」

「一応、僕の方にも体験派から話が来てたよ」

リコーとノーマは、それぞれの陣営から助力を求められていると明かす。いずれも自分達が有利になるよう、取り計らいを期待したものであろう。

「実行委員会に籍を置く身としては、公平に振る舞うようにしたいよね」

「そうそう。どっちかに肩入れしたら遺恨が残るだろうし」

二人は両陣営の働きかけを受け流すつもりようだ。朔耶はその判断を評価しつつ訊ねる。

「意見がバラバラっていうのは、具体的にどんな感じなの？」

「そうだねえ。例えば僕のところに来た体験派の話だと、複数の支援魔術を体験してもらうつてのとか、移動補佐の魔術に絞って素早く動ける状態を楽しんでもらうつてのがあったかな」

他には的に向かって球を投げてもらい、その球を風の魔術でサポートして確実に的に当てるといふものなどなど。

「あゝ、実演派の意見も色々分かれてるみたいだよ？ 詠唱から発現までを解説しながらじっくり

見せようって考えの人とか、とにかく大勢で撃ちまくって派手にしようって人とか」

「それって、全部採用しちゃダメなの？」

「うーん、難しいんじゃないかなあ」

「みんな自分達が学び塔の中心勢力になりたがってるもんね」

朔耶の疑問に、ノーマとリコーは苦笑気味に答える。ちなみに校庭で装飾魔術ショーをやる事にしたグループは、そういった学び塔内での権力闘争から降りた人達で構成されているという。

「要するに派閥争いなね……」

「まあそんなところかな」

少し脱力しながら口にする朔耶と、それを肯定するノーマ。

「武術の塔の方は、あんまりそういう対立とか聞かないわよねー」

リコーの言葉に、剣士エルスレイや重戦士コルテリウスはうむと頷く。元々魔術士嫌いで知られるエルディネアは、どこか得意気に「ふふん」と胸を張っていた。

「はあ、分かった。ちよつとあたしが出向いてお話ししてくるよ」

そう言つて席を立つ朔耶。

今回の精霊文化祭は、各国の賓客を招く、国を挙げての一大イベントとなる。学生キャンプや修学旅行とは、規模も重要度も段違い。

将来、学院の伝統行事にもなり得るお祭りだ。学生間のつまらない派閥争いなどで、ケチを付けられるわけにはいかない。

ここは朔耶が仲裁に入つておいた方がいいだろう。

「これで魔術の塔の問題は解決だね」

サロンを後にする朔耶を見送りながらドーソンが告げると、チームメンバー達は揃つて頷いたのだった。

後日、ティルファから正式に参加の返事が来た。各国の賓客はただ招かれるだけでなく、その国を代表した催し物を披露する事になっている。

ティルファでは発明品の公開などが検討されており、その中でも特に最近注目を浴びている、ティルファ式機械車の体験試乗会が企画されていた。学院の敷地内に専用の仮設コースを作るといふ案が出ているようだ。

今日これからグラントウルモス帝国に向かう予定の朔耶は、宮廷魔術士長レイスの執務室で帝国に届ける書類を受け取りながら、そんな話を聞いた。

レイスはさらに、ティルファの機械車について小耳に挟んだ情報を教えてくれる。

「先日の修学旅行で観光コース巡りに使われた事が、機械車の可能性を一層広げたそうですよ」

「サムズの工事現場で人員輸送の実績とかもあるもんね」

ティルファの機械車開発に、『サクヤ式』発明が大きく影響している事は否めない。

朔耶は自分が持ち込んだ科学技術によって、こちらの技術を急速に発展させると、様々な悪影響を招くのではないかと懸念している。

だが、ティルファの主導者ブラハミルトは、技術の発展はもちろん人々の暮らしについてもしっかりと考えた考えているので、その辺りは朔耶も安心していい。

「さーて、それじゃあバルのところへ行ってくるよ」

「ええ、お気を付けて」

書類をリュックにしまつて背中に担いだ朔耶は、レイスに見送られながら宮廷魔術士長の執務室を後にした。

王都フレグンスから帝都クラティシカまではかなり距離があるので、一度地球世界の自宅の庭に戻ってから再び異世界へと転移する。こうする事で時間と距離を大幅に短縮できるのだ。

朔耶は長大な距離を飛び越えて、帝都城の地下祭壇跡に出た。帝都城に転移した時は、大体いつもここに出る。

「さてさて、バルの執務室に行きましょうかね」

リュックを背負い直した朔耶は、上層階にある皇帝の執務室へと足を向けた。

「やほー、バルいる？」

荘厳な帝国旗が壁にでかかど掲げられ、厳粛な雰囲気にも包まれた皇帝の執務室に、まるで遊びに来たかのような軽い挨拶が響く。

「いらつしゃーい、サクヤちゃん待つてたわよん」

既に部下から朔耶来訪の一報を受けていたアネットが、同じく軽い雰囲気でも出迎えた。

帝国の密偵組織は優秀で、帝国領の街や村はもちろん、帝都城内にも張り巡らされた諜報網で、

あらゆる情報を迅速に収集する。朔耶が地下に現れると、すぐに報告が上がるようになっていたのだ。

「よく来たなサクヤ、ゆつくりしていくが良い」

いつも忙しそうに書類と格闘しているバルティアが、珍しく休憩用のテーブルで寛ぎながらお茶を勧めた。朔耶の気を引くべく、茶菓子として帝国産ケーキもすっかり常備してある。

ホイホイお呼ばれる朔耶。

「実は、今日はフレグンス高官のお仕事で来たんだけどー」

「ほう」

ケーキを頬張りながら仕事の話をする朔耶と、楽しそうにお茶を飲みつつ応じるバルティア。朔耶はレイスから預かってきた書類を渡し、精霊文化祭について説明した。

「ふむ、各国から賓客を招いての精霊祭か」

賓客達が信仰上の理由から参加しづらくならないよう宗教色を薄めつつ、精霊神殿の格式やら威光やらを意識した上品な催しを行う事になっている。

「帝国からも誰か参加してほしいんだけど、バルが来るのはさすがに無理よね？」

「いや、問題無い。余も是非参加させてもらおう。アネットよ、予定の組み直しだ」

「はあ、仕方ありませんねえ」

皇帝補佐官としての振る舞いがすっかり板についた元密偵隊員アネットは、溜め息を吐きながら公務の予定の見直しを図る。

「ところで、我が国の催し物はどうしましうか？」

予定表をチェックしていたアネットは、先程の精霊文化祭の説明の中にあつた、『参加した国が自国を代表する催し物を披露する』という件についてバルティアに訊ねる。

帝国の名物と言えば、武術や魔術の道場と竜籠だろう。他には発掘品が若干多い程度なので、帝国らしさを出せるような催し物は思いつかない。

帝国軍部隊の『高速陣形構築』などは迫力があつて見栄えもするが、精霊祭としての一面を持つお祭りであり物々しい事としては場違いになる。

竜籠も数こそ圧倒的だが、今や各国が所有しているため今ひとつインパクトに欠ける。発掘品の中には展示できるものもあるが、そもそもが古代文明の遺産なので、帝国を代表する催し物には向かない。

ふむと顎に手を当てて考え込むバルティアに、朔耶は大学院側の催し物で既に決まっている内容を参考までに話した。

「——あと、ティルファは機械車の体験試乗会にしてみたい」

「ほう？ 機械車を出すのか。では我々も自動四輪を持ち込んで競争を——」

「却下」

即行でダメ出しする朔耶。

「もー、偉い人がいっぱい参加する国を挙げてのお祭りなんだから、真面目に考えてよ」

「余は結構、真面目に考えているのだが……」

「じゃあもつと真剣に」

「むう」

あーでもない、こーでもない、アイデアを出し合う朔耶とバルティア。

そんな二人のやり取りを、アネットはニヤニヤしながら見守る。バルティアの朔耶への好意はほぼ一方通行で、両者の関係は遅々として進展しないが、こうして親しみが増すのは良い傾向だ。

「んー、じゃあ帝国料理とかどう？」

帝国の肉料理はポリウムが凄い。帝都城の二階には士官食堂があり、サクヤ式コンロが導入されてからは色々な料理がメニューに追加され、朔耶のお気に入りの店となっている。

以前はメニューが四種類ほどしか無かつたが、その当時から高い人気を誇る豪快な肉料理があつた。

「岩肉スープとか良さそう」

「あれか」

岩のような肉の塊をスープでじつくり煮込んだだけのシンプルな料理だが、帝国料理人の秘伝のスープと調理技術で煮込まれた肉塊は、見た目のゴツさとは裏腹にとても柔らかくてジュシーだ。

「フレグンスだと、肉をあんな風に煮込んだ料理はあんまり見ないから、結構話題になるかも」
「ふむ、大型の竜籠を使えば食材も難なく運べるし、悪くないな」

そんなこんなで帝国の出し物として、帝国風の肉料理が振る舞われる事になった。料理人の選定や食材の調達など、細かい部分は帝国側で調整するという。

精霊文化祭への参加表明は後日、帝国から正式にフレグンス王国に通達される。

「さて、お話も済んだし、そろそろ行くね」

「もう帰るのか？ たまにはもつとゆっくりしていけ」

「あたしも忙しいのよ」

誰かさんが真面目に考えないから話が長引いた！ などと言いながら席を立つ朔耶。腕時計を確認すると、時刻は十二時十六分を指していた。

「岩肉スープの話したら、久々に食べたくなっちゃった。食堂でお昼食べて帰るね」

「では余も——」

「陛下はお仕事しましょうね」

朔耶に付いていこうと立ち上がったバルティアを、側近スマイルのアネットが執務机に誘導する。精霊文化祭に参加するためには、向こう十数日分の予定を変更するだけでなく、様々な案件を早急に済ませてしまわなければならないのだ。

「がんばってね」

重厚な執務机に連行されて恨めしそうにしているバルティアに、ひらひらっと手を振って一声かけた朔耶は、帝都城二階の士官食堂へ向かうのだった。

士官クラスの兵士やその家族で賑わう士官食堂は、あまり畏まった雰囲気ではなく、ほどほどに上品なレストランとして、しばしば帝国貴族にも利用される。ファミリーレストランのような気楽さもあって朔耶は気に入っていた。

カウンターで食事を受け取り、空いている席を探して食堂内をうろろろしていた朔耶は、隅の席に見知った顔を見つけた。

「あれ？ フェルトさんだ」

「サクヤ殿か。今日は陛下にお会いしに？」

「うん、仕事の関係でね。それにしても、何でまた食堂に？」

「ちょっととした気晴らしですよ」

静かな屋敷での食事もあるが、食堂の活気の中での食事たまには良いという。それで時々来ているらしい。

かつてはフレグンスの門閥家として宮廷魔術士長の地位にあったフェルト卿。当時は裏で帝国に与し、フレグンスが帝国の傘下に入るよう数々の工作をしていた。

そして朔耶を帝国に連れ去った張本人でもある。

母国フレグンスで工作や派閥争いをしていた頃に比べて、門閥家としての気負いも無くなり、今はノンビリ過ごしているらしい。晩餐会なども開かなくなったので、こうした賑やかな場所が恋しくなったのかもしれないとの事だった。普段はメイドのリリーもよく連れてきているが、今日は一人なのだそう。

「そっかー、リリーちゃんは元気にしてる？」

「相も変わらず、といったところですね」

元奴隷で『所有した主人が立て続けに死亡する』という曰くつきだったリリー。

当時、屋敷の使用人を募集しても応募がなく、困ったフェルト卿が奴隷を使用人にするためキトまで買い付けに行った際、それと知らずに余った資金で買った少女だった。

既に家族も故郷も失っていた彼女は、朔耶の働き掛けで奴隷禁止令が出された後も、一人フェルト卿の屋敷に残って正式な使用人となった。今は屋敷に使用人が増えたので、リリーにも友人や話

し相手が出来たようだ。

朔耶はフェルト卿の対面に相席させてもらうと、近々フレグンスで精霊文化祭が行われるという旨を説明した。

現在その準備の真っ最中であり、同時に各国の要人に対して招致活動をしている事も。

「なるほど、それで陛下のところへ」

「うん。フェルトさんも参加してみる？」

「はは……、私にはフレグンスの催しに参加する資格などありませんよ」

「あ……」

自嘲するような笑みで答えるフェルト卿に、朔耶はつまらない質問をしてみたこと反省する。色々と事情もあったようだが、彼はフレグンスを見限って帝国に亡命した人間なのだ。

いくら両国の友好がかつて無いほど深まっているとはいえ、裏切り者である彼が、フレグンスの公式イベントに顔を出せるはずも無い。

朔耶の気まずそうな様子を見たフェルト卿は、空気を変えるべく別の話題を振ってきた。

「フレグンスと言えば、最近少し気になる噂を耳にしまして」

「気になる噂？」

「サクヤ殿は、ダンベックという名を聞いた事がありますか？」

「んん？ そういえば、前にエバンスのスラムで聞いたような……」

かつてサムズ国の首都エバンスには大きなスラムが存在し、少年窃盗グループや人買い商人など、様々な犯罪集団が潜んでいた。そのスラムを牛耳る中枢組織を率いていたのが、ダンベックという人物だったと朔耶は記憶している。

頷いたフェルト卿は、そのダンベックという男について語り始めた。

「あれはその昔、フレグンスの裏社会で暗躍していた野心家です」

「野心家？ 盗賊とかじゃなく？」

フェルト卿の話によると、ダンベックは盗賊まがいの事もするが、それはあくまで目的を果たすための手段の一つに過ぎないらしい。

規模はどうあれ盗賊団の頭目という程度の座に収まる男ではないという。己の利益のみを求めているわけではなく、裏社会を牛耳る事を目的とし、必要とあらば慈善事業から子供の誘拐まで、何でもやる。

その類稀なる知略と手腕とカリスマで、大小様々な集団を寄せ集め、瞬く間に巨大な組織へ纏め上げてしまうのだとか。

「マフィアのドンみたいな人なのね」

「そのダンベックが最近、フレグンスの周辺で頻繁に目撃されているらしいのです」

フェルト卿は、フレグンスで宮廷魔術士長をやっていた頃や、それ以前にも、汚れ仕事を担う裏社会の組織と、よく取り引きをしていたそう。そんな中でも、ダンベックは別格の存在だったらしい。

「何度か仕事の依頼をした事がありますが、奴は仕事の内容もその影響もよく理解していました。請け負った仕事の内容から依頼者の事情や意図を読み取って、世相を把握するのです」

フレグンスの裏社会を牛耳り、多種多様な人脈を通じて貴族間の派閥にも精通するダンベックは、特権階級層に使役される下賤の衆を装いながら、実質その働きで貴族の派閥に干渉していたという。

自分達にとって都合の良い貴族が強い発言力を持つよう、様々な工作を以て組織の足場固めを行い、やがては門閥貴族の威光を笠に着て、王国騎士団さえ迂闊に手出しできないような勢力を作り上げたそう。

「あ、それって昔ルティが誘拐されたっていう、あの話に関わってる組織？」

ふと思いついた朔耶がそう訊ねると、フェルト卿は頷いた。およそ三年前、第二王女ルティレイフィアが犯罪組織に誘拐され、門閥家の次男ガリウスによって救出されたのだ。

「あの事件の後、ダンベックはフレグンスから追放されたのです。カイゼル王は将来を見据えて奴を処分しておきたかったようですが、国がごたついていた時期だっただけに後手に回りましてな」
フェルト卿は少し言いにくそうに説明すると、ダンベックの持つ厄介な特性について警告する。

「奴は、酔狂で動く男です」

「酔狂？」

「奴の野心的行動の裏には悪意が無い。これがどういう事か、分かりますかな？」

「悪い事を悪い事と認識せずにやれるって事？」

朔耶の問いに「もちろんそれもあります」と答えたフェルト卿は、あれだけ大規模な組織が王都で暗躍していたのに、精霊神官達の『精霊の知らせ』に引っ掛からなかった点を指摘する。

「ああ、そういうえば、そういう話は聞かないね」

「奴は、『精霊の知らせ』の躲し方を知っているのです」

精霊は何らかの災厄の兆候を、精霊神官や精霊術士に知らせる事がある。だが、明らかに災いとなるモノにしか反応しない。悪意を感じたとしても、それが大きな災厄をもたらすものでなければ、危険を知らせる事は無いのだ。

実はフェルト卿もフレグンスに対して悪意があったわけでは無いので、数々の工作が精霊に察知される事は無かった。そもそもフレグンス王国を貶める事が目的ではなかったからだ。

派閥体質に基づく悪しき因習と、重鎮貴族達のやり方に辟易していたが故の見限り。帝国の軍門に下った方が、派閥政争に明け暮れる悪徳貴族が一掃されて、良い国になるとまで考えていた。

ブラフニール公爵の暗殺計画もその考えによるものだったが、こちらは朔耶にとって大きな災い

となるため、当時朔耶と重なっていたフレグンスの精霊から『精霊の知らせ』が発せられたのだ。

「そんな仕組みになつたのかー」

「精霊に関しては私もあまり詳しくありませんが、今までの経験からの推測です」

もう二年近く『精霊と重なる者』として生活してきたのに知らなかったわー、と感心する朔耶。

だが、フェルト卿はその数倍の歳月を精霊の国で過ごしてきたのだ。それ故に精霊を侮って朔耶を帝国に拉致した結果、しばらく冷遇されるというしっぺ返しも喰らっているが。

フェルト卿は改めてダンベックについて語る。

「ダンベックという男は、フレグンス王族の精霊との関係や、重鎮貴族との関係、それに貴族間の派閥構造までも熟知しています」

フレグンス王族と国家の存続を前提にした企みならば、フレグンスの精霊から敵対行為と見做される事もない。そう考えたダンベックは、国の増益、発展にも寄与する事を念頭に動いていたという。

悪意では無く、野心という形で。野心による成り上がりの過程でライバルを蹴落とし、国家の中核に浸透していくやり方。

王族や国家そのものは存続しつつ、国を動かす人間が代わるだけなら、精霊は王国の危機とは見做さない。そうした人間の価値観と精霊の価値観の差異を、ダンベックは利用していた。

王室の権威や権力は継続され、国政はダンベックの息が掛かった貴族達によってつつがなく維持される。表向きは健全で平穩に統治される立憲君主制国家となるが、その実態はダンベックが全てを支配する独裁国となる。

つまりダンベックは、裏社会から王国を支配しようとする目論んでいたのだ。

その目論見に気付いていたフェルト卿は、帝国との取り引きを強める事で対抗していた。当時のフレグンスはマフィアに牛耳られるか、帝国に取り込まれるかという瀬戸際に追いやられていたのだ。

ダンベックが追放されると、フェルト卿の手引きした帝国勢が台頭してフレグンスは変わらず窮地に立たされていたが、朔耶が現れてからそれらの暗雲は全て吹き飛んだ。

「ダンベックの暗躍が気に掛かります」

フェルト卿は、フレグンスの高官でもある朔耶に懸念を訴える。話を聞き終え、食事も済ませた朔耶は、ダンベックの事を心に留めておくと言って食堂を後にした。

帰り際、朔耶は内心で神社の精霊と話し合う。

『何か、フレグンスの事を心配してたっばい？』

ソノチヲ サリトテ コキヨウハ カワラス

『フェルトさんの故郷って、一応フレグンスだもんね』

一旦地球世界の自宅の庭に還り、再び王都フレグンスへ転移した朔耶は、フェルト卿の話を王妃アルサレナの耳にも入れておこうと思ひ、城の上階へと翼を向けるのだった。

数日後の大学院、いつものサロンにて。

帝国からも正式な参加表明があり、帝国料理が振る舞われるという朔耶からのネタバレが話題になつていたりする今日この頃。

エルディネアのチームと共にテーブルを囲む朔耶は、学院側の催し物リストを手に、新しく決まった項目をチェックする。

「魔術の塔の催し物は、体験派と実演派と一緒に進める事になったんだね」

「なったというか、貴女がそうさせたというか」

エルディネアは、そう言つて肩を竦める。そして、朔耶が双方の代表に話を付けに行った後の顛末を語つた。

朔耶が帝国に出掛けている間、催し物の事で対立していた学生術士達は、朔耶から提案された実演派と体験派の共催について議論を交わしたらしい。結果、その提案を採用する事にしたと、魔術の塔のイベント運営を担当している学生チームを通して、実行委員に報告してきたという。

要は、『仲良くやれ』という戦女神の提案を丸呑みした形だ。それぞれの陣営の幹部達が真剣な

顔をして悩んでいたと、リコーとノーマが苦笑しながら語る。

「これで学び塔の催し物も全て決まりましたわ」

大学院と精霊神殿の出し物はひとまず決まったので、後は各国来賓の催し物に使うスペースを割り当てる。

ティルファの機械車試乗会などは大掛かりで、かなり広い場所を取るため、早めに工事を進めなければならない。

「これが今現在進めている企画や、保留にしてあるもののリストだ」

エルスレイとコルテリウスが広げたリストをふむふむと覗き込む朔耶。

ノーマやドーソンも含めた男性陣が実際に学院内を歩き回って得た情報を、エルディネイア達女性陣が取り纏めて各部署の担当チームと連絡を取り合い、詰めていくというやり方で準備が進められている。

どうしても調整が付かない場合は、調停役として朔耶が出向く（大体それで解決する）。だが現在のところは、朔耶の仲介が必要な案件も無いようだ。

「うん、順調、順調」

朔耶はウムウムと頷く。するとドーソンがこんな事を言った。

「サクヤは本当に、希望で繋ぐみんなの架け橋だね」

うん？ と小首を傾げる朔耶。

「それを言うなら、みんなを繋ぐ希望の架け橋ですわ」

言わんとする事は理解できなくもないが、『希望で繋ぐみんなの架け橋』では一瞬意味が分からない、とエルディネイアがすまし顔でツッコんだ。

「何か良い事言おうとして失敗したドーソンはさておき、あたしはそろそろ行くね。これから公務だから」

さらっと流した朔耶が席を立つと、ドーソンは憂いを帯びた表情で項垂れながら、哀愁漂う呟きを漏らした。

「世の中は無情だねえ……」

ノーマとエルスレイ、コルテリウスが「ぶふっ」と噴き出し、リコーは「きゃはははっ」とお腹を抱えて笑い転げる。またもやツボにハマったらしい。『いつものお約束』的にスベるドーソンをネタに、息抜きがてら騒ぎ始めるチームメンバー達。

「次はアーサリムに向かう予定なんですかね？」

「うん、部族長さん達の送り迎えに竜籠を使う目途が付いたんだって」

エルディネイアの問い掛けに、朔耶は招致活動も大詰めだと告げる。アーサリムは今回の精霊文化祭にティルファや帝国と共に参加する事によって、名実共にオールドリア大陸の四大国の一角とし



て認められるのだ。

「そう考えると、結構政治的な意味合いの強い行事とも言えますわね」

「まあ、その辺りは学生のあたしらが意識しなくても大丈夫だよ」

結果的に国や政治も絡んではいるが、そもそもの発端は精霊神殿のお祭りと学園祭とのコラボ企画なのだ。

「学生は学生の本分を全うすればいいのよ」

「貴女が言っても説得力に欠けますわね」

王都で王女様と派手な空中戦を繰り広げて旧市街地を丸ごと瓦礫の山に変えたり、王室直属の高官として各国の主導者や皇帝に直接会いに行ったり。そんな「普通の学生」は存在しないとツッコむエルディネイアに、朔耶は明後日の方を向いて口笛を吹く。

「それじゃ後はよろしく」

「ええ、任せましてよ」

今日も楽しく賑やかな大学院生活を送る朔耶は、アーサリムに向かうべく、一旦地球世界の自宅の庭へと帰還するのだった。

お昼頃。アーサリムの入り口であるササの街に転移した朔耶は、アーサリムを統治するプブ族の

集会場を訪ねた。

「こんにちは、大族長さんいますか？」

「おお、サクヤ殿！ お待ちしておりましたぞ」

集会場には高位部族の族長達が集まっていた。団座の奥には大族長ブレバントの姿がある。彼はアーサリムに存在する多くの部族を纏め上げるプブ族の長で、実質この国の王であった。今日、朔耶を訪れる事はフレグンスから通達されており、国家の官僚でもある高位部族の族長達をまとめて待っていたらしい。

「こ、この度は、大国フレグンスのご招待にあずかり、大変光栄であるせ……ある……あり」

「あはは、難しい言い回しとかしなくていいですよ。普通に話しましょう」

アーサリムの地から出た事が無い彼等にとって、今回の精霊文化祭への参加は初めての公式な外国訪問となる。

そのせいもあってか珍しく緊張しているらしいブレバントの咬み咬み挨拶に噴き出した朔耶は、堅苦しい挨拶は抜きにして交渉に入った。

交渉と言っても、実際にフレグンスを訪れる人員や、運び入れる荷物の確認が中心となる。

既に連絡網の整っているティルファや帝国となら、そういったやり取りも迅速に行える。だがアーサリムのように未開拓かつ遠方の国が相手となると、通常の連絡手段では時間が掛かりすぎてしまう。

そこで朔耶の出番というわけだ。竜籠を使っても片道二日は掛かる距離を数秒で移動できる朔耶が直接話を聞きに来る事で、スムーズに段取りを付けられる。

「ブレバントさんに同行する族長さん達は、四人でいいのね？」

「ああ、ここにいる高位部族長達の中でも重鎮と言える者達だ」

その他、護衛として同行する精鋭の部族戦士が十人。彼等は精霊文化祭の催し物も担当するという。精霊に祈る儀式に用いられる部族の踊り、『感謝の舞』を披露する事になっていた。

フレグンスの人々にとってはなかなかエキゾチックでウケるのではないかと、朔耶は期待している。

「それじゃあまた当日に。よろしくお願ひしますね」

「こちらこそ、よろしく頼む」

アーサリムの統治者達との会談を終え、送り迎えの竜籠についての段取りも済ませた朔耶は、プブ族の集会場を後にした。

「帰る前に、ちよつとササの街を見物していこうかな」

辺境の小さな田舎街という雰囲気だったササの街も、アーサリムが四大国入りしてからは北方から訪れる人が増え、色々と様変わりしている。

形の崩れた石造りの建物は相変わらず健在だが、帝国やティルファ、フレグンスの街に見られるようなデザインの建物もぼつぼつと建ち始めていた。

『あと半年もしたら、サムズのクルストスくらいにはなってるかも』

ヒトノ イトナミハ ジツニ メマグルシイ

神社の精霊とアーサリムの発展について話していると、街の通りで思わぬ人物と出くわした。

「あれ？ メリルーさん？」

「おんや、サクヤ嬢ちゃんかえ。しばらくぶりだのおくふえつふえつふえ」

自然の石柱が並ぶボルモーン溪谷の隠れ里に住んでいた魔導師メリルー。

フレグンスの第二王女ルレイフィアの魔術の師匠であり、魔族組織との戦いの折、朔耶に『呪い払い』という解呪術を覚えてくれた人物だ。

「里から出てきてたんですか？」

「うむ。もう身を隠しておく理由も無くなったぞな」

「あ〜……」

メリルー導師が結界を張った隠れ里に住んでいたのは、魔族組織から身を隠すためでもあったのだ。魔族組織が無くなった今は、隠れ里を出てこのササの街に住んでいるという。

「ところで、この前レイフィア嬢ちゃんに誘われたのじゃが……王都で祭りがあるそうじゃな」

メリルー導師は、ルレイフィアから『出来れば王都に来てほしい』と誘われている事を明かす。お祭り見物のために王都を訪れ、もし気に入ればそのまま住み着く事を勧められているらしい。まだ祭りの詳細が決まっていないので、後日また改めて連絡すると言われたそうだ。

「へえ、ルティがそんな事をねー。実は今、精霊神殿の精霊祭と大学院の学園祭を合わせた、精霊文化祭っていうお祭りを準備してるんですよ」

朔耶は神殿側からの依頼で信徒を集めるための催し物考えたのだと説明した。

「ほほ、精霊神殿も丸くなったモノじゃな……いや、相手が嬢ちゃんだからかろう」

昔は序列と仕来りでガチガチに固められたお堅い組織だったのにと、メリルー導師は懐かしむ。

「ルティも誘ってる事だし、メリルーさんも参加してみませんか？ 族長さん達を竜籠で運ぶ事になってるんで、一緒に乗れば王都までひとつ飛びですよ」

「ふむ……それも一興かろう」

メリルー導師から参加の返事を貰った朔耶は、一度ブブ族の集会所に戻り、ブレブラバント達に同行者を一人追加させてほしいと話す。

何故か酒盛りをやっていた彼等は、急に朔耶が戻ってきたので少し慌てた様子だったが、話を聞いて快く了承してくれた。

「それじゃあ、メリルーさんの事よろしくお願いしますね」

「分かった。導師は我々が責任を持って送ろう」

ブレブラバントが力強く応えると、族長の一人が呟いた。

「紅獅子の師匠か……そういえば、彼の王女殿は既に帰国したようだな」

その族長は、紅獅子ことルティレイフィアが先日、私兵である傭兵騎士団を引き連れて、竜籠で飛び立つのを見たという。今頃はフレグンス本国に到着しているかもしれないと朔耶は思った。

朔耶がササの街を見物していた頃。王都フレグンスの一般区にある宿場通りにて。

「さて、私は一度城に顔を出してくる。お前達もゆっくり骨を休めるといい」

「了解しました。行ってらっしゃいませ」

帰国したルティレイフィアは、ヴィンス達傭兵騎士団を高級宿で待機させ、自身は城へと向かう。近く、精霊文化祭という大きな祭りがある事は周辺各国にも広く周知されており、王都には連日多くの人々が訪れ賑わっている。

そんな街の通りを歩いていたルティレイフィアは、雑踏の隙間に知った顔を見た気がして、じつと目を凝らした。

「つ！ あの男は!?」

目深に被ったローブに隠れて一瞬しか見えなかったが、間違いない。

およそ三年前、十四歳だったルティレイフィアが城を抜け出し、お忍びで下街に出向いた際、当時フレグンスの裏社会に蔓延っていた犯罪組織に誘拐されるという事件があった。

その組織の頭が、今見かけたダンベックという男だった。彼はルティレイフィアを誘拐した張本人でもある。思わず後を追おうとしたものの、人混みの中に見失ってしまった。

（何故奴が王都に……?）

そこはかとなく不安を感じたルティレイフィアは、父カイゼル王や母アルサレナにも伝えておくと、足早に城へ向かうのだった。

久しぶりに王都フレグンスを訪れたダンベックは、とある計画の下見のために一般区の通りを歩いた後、迎える馬車に乗り込んで商談相手の屋敷へ向かった。

区画門を越えて貴族街に入った馬車は、さらに上の区画——門閥貴族しか住む事の許されない上流区へと入っていく。

「ここも久しいな。昔とほとんど変わっていないじゃないか」

「いえない、昔に比べると色々変わっていますよ」

ダンベックの隣に座る王都の豪商は、そう言って通りに並ぶ街灯を指した。

「サクヤ式ランプってやつか。今は王都中に設置されているらしいな」

「ええ。あれのおかげで夜の商売も活発になりました」

夜間営業の店や酒場が増えたと説明する豪商は、普段の商談時に浮かべる笑みを維持しながらも、どこか落ち着かない様子でそわそわしている。

そんな彼の心中を察したダンベックは、宥めるように言った。

「まあ、そんなに気負うなよ。今はおっかない精霊の使いが幅を利かせてるだろう？ 昔ほど派手な活動は出来ないし、ちよつとした便利屋くらいの立ち位置に収まるつもりさ」

「あ、いえ、それは……ははは、いやはや、かないませんなあ」

豪商は内心の不安を気取られた事に恐々としながらも、ダンベックの隠居宣言とも取れる言葉を聞いて、少し気持ちを落ち着かせる。

ダンベックはこの日、昔の伝手でフレグンスの要人に会う算段を付けていた。

三年前、フレグンスから追放されたダンベックは、いざれ王都に舞い戻った時のために、自分達の組織と交流のあった商人や貴族の名が漏洩しないよう、保険をかけておいた。組織の協力者である彼等に累を及ぼさない事で、縁が切れないようにしていたのだ。

ダンベックが極刑に処される事なく追放となった裏には、下手に処刑でもしようものなら、王宮勤めの門閥家や上流貴族にとつて都合の悪い情報が明るみに出る危険があったからだ。

王都の裏社会はダンベックの組織が牛耳っていたため、情報を握られている上流貴族達は口封じ

に動くという手段も取れなかった。

城内にすらダンベックの息が掛かった者が潜んでいる状況では、暗殺の指示を出した時点で察知されてしまう。誰もそんな藪蛇になる事はしつがらない。

カイゼル王やアルサレナ王妃は、将来へ遺恨を残さないためにも、この大悪党を処分しておく方針で事を進めていた。しかし、王家を支える重鎮の多くが反対したので、出来なかったのだ。

当時はちょうどフェルト卿が本格的に工作を始めて、王家の威光にも陰りが見え始めた頃だったのである。

大貴族御用達の豪商と共に、とある門閥家の屋敷を訪れたダンベックは、通された客間に豪商を残して、一人屋敷の奥へと案内された。

（調度品が少し減っているな）

壁に飾られた豪華な美術品を鑑賞しながら廊下を進み、やがて人払いされた奥の部屋に辿り着く。案内役の執事は部屋の主に来訪者の到着を告げると、一礼して下がった。

口の端を上げてそれに応えたダンベックは、扉を開いて部屋へと足を踏み入れる。この日のために練り上げた壮大な計画。その最初の一手をここから始めるのだ。

灯りを抑えた薄暗い部屋に入ると、円形に並べられた豪華な椅子に腰かける紳士達から、探るよ

うな鋭い視線で迎えられた。

そのうちの何人かは以前に比べて鍛が増えているものの、よく知る馴染みの顔である。他にも数人いるはずの知り合いは見当たらず、代わりに知らない若人の姿がちらほらと見えた。

「やあ皆様方、お久しぶり。お元気そうで何より」

「本当に貴様だったか……」

「よもや戻ってくるとは思わなかったぞ」

ダンベックの軽い挨拶に、歓迎とも厭味ともつかない反応を示す初老の紳士達。彼等はここ王都フレグンスにおいて重要な役職に就く、門閥貴族達である。

かつては国家を支える重鎮四家として富と権力をほしいままにしていたが、戦女神サクヤに手を出して富と権力を大幅に削られるというしっぺ返しを喰らい、二年後には引退させられる事が決まっている。

最近はずつかり求心力も落ちて目立たなくなっているが、彼等の築いた派閥による強い発言力と潜在的な権力はまだまだ健在だ。

「このところ景気の悪そうなあんた等に、良い儲け話を持ってきたんだ」

「昔の伝手を使ってわざわざ我々を集めたのだ。相応の価値を示せるのだろうか？」

「ああ、もちろんさ。まあ聞いてくれよ」

ダンベックは居並ぶ門閥家の上流貴族達に、自分の計画を持ち掛けた。

王都フレグンスで、今なお燦る反戦女神派や日和見派の貴族達。彼等も動員しての大工作を仕掛けるのだ。リスクも少なく、悪くない条件だろうとアピールする。

サクヤ派の一強体制を崩すべく、対抗勢力を立ち上げ、貴族中心の健全な社会を確立する。ダンベックはそんな内容を語った。

「名誉と権威があるべき場所へ——その名も『英雄計画』さ」

「英雄計画……」

圧倒的な力を以て王都の政治を牛耳っているとも言える戦女神派。それを打ち破るため、正当な段取りを経て対抗勢力を構築する。

民衆の支持はもちろん下位貴族層の支持も得て、表向きは極めて平和的に、王都の人々の支持を二分する狙いだ。

以前、重鎮四家の派閥にいた若者グループが同じような計画を企てた事がある。その時は、レテイレスティア王女の支持層を貴族で固める一方、戦女神の支持層を民衆のみにする事で棲み分けを明確にし、王宮からサクヤ派を駆逐して自分達の発言力を強めようとした。今回のダンベックの計画は、その改良版である。

「王都に戻る前に調べたんだが、あんた等にしては随分と下手を打ってるみたいじゃないか」